

文化人類学 I 講義情報

1、テキストとして王柯「多民族国家中国」岩波新書、を使用している。学生と読みあわせをしていて、私が持っているテキストと文章が少し違っていることがわかった。増刷のときに文章の手直しが行われている。

2、講義の最初に、ウイグル調査のビデオを、ウイグル文化を解説しながら見せた。一人で調査しながらのビデオなので、相変わらず難しい。編集も時間が足りない。

3、「民族」の概念について：民族は言葉としては、古くから中国にあったが、それは単に「共同体」の意味であり、現在使われている「民族」は、NATION の翻訳語として明治期に日本が作ったものである。

4、中華文化を作ったといわれる中国の古代王朝、夏、殷、周などは異民族による王朝だといわれるが、この時代の民族の考え方は現代と異なるので、何を基準にして異民族といわれるのかが不明なところもある。すでにこの頃から正統的な中華文化が存在したのだろうか。

5、中華文化を囲む「東夷、西戎、南蛮、北狄」という図式は、文化人類学で異文化、異民族認識においてよく使われたものである。これは自民族中心主義（エスノセントリズム）の典型であるという説明がなされていた。しかし、著者はこれは民族差別の認識ではなく、「けものへん」などの漢字が使われているのは、異民族の狩猟などの文化様式を表しているという説を打ち出している。検討に値する説である。

6、中国の伝統的王朝では「天」の観念は重要なものであった。皇帝は天子であり、治める地域が天下である。「九州」という言葉が出てくるが、これは全国の意味であり、「九」は最高の数である。

7、漢民族という幻想：中華人民共和国になった後、政府は民族識別工作を行い、結果として、今の56の民族の区別を作り出した。その中で漢族だけが、全人口の90%も占めることになったのか。中華文化は大漢民族主義に引き継がれたのか。この90%の中に、言語が通じない集団がいくつか存在する。言語はこの民族識別を行う中で使われたスターリンの民族の定義においても重要なものになぜそうなったのか。その鍵は、漢字という文化である。秦の始皇帝が漢字を統一して以来、甲骨文字、金文字の神秘性は消え去り、文字として成立した。そのとき以来、漢字を使う民族が漢族である。話し言葉中心主義の西欧と違い、アジア文化圏では書き言葉中心である。話し言葉として通じな

い民族も、書けば通じるなら、それは同じ民族である。漢民族の肥大はこのようにして生まれた。(つづく)

8. 宗教と民族に関して、その民族の強いアイデンティティとなっているのは、イスラムとチベット仏教である。チベット仏教は仏教の後期に興隆したものが、チベットに伝わり、独特の展開をした。日本で言えば密教に近いものがある。その独特のあり方は、政治と宗教が一致していることである。生活の隅々まで宗教がいきわたっている。日本でも有名なダライラマは、宗教的にも政治的にもチベットのリーダーであった。当然ながら、中国の一部となった今は、政治はまったく変わった。しかし、宗教はそれほどの変化は見せていない。